

【6月の気象】

6月は梅雨に入る時期となり、1年で最も降水量の多くなります。梅雨は、東アジアだけにみられる現象で、春から盛夏への季節の移行期に、一般的には、日本から中国大陸付近に出現する停滞前線（梅雨前線）が、南北振動を繰り返しながら沖縄地方から東北地方へゆっくり北上します。

梅雨前線上の低気圧の影響等で暖かく湿った空気が、梅雨前線に流れ込むと、梅雨前線の活動が活発化し大雨が降りやすくなり、集中豪雨などで、災害をもたらすことがあります。近年では平成30年7月豪雨により愛媛県は甚大な被害に見舞われました。また、前線が長く停滞すると雨による被害だけでなく、低温や日照不足で農作物に被害が発生します。一方で、梅雨前線の活動が弱く空梅雨になると、水不足の心配をしなければならなくなることがあります。

四国地方の梅雨入りは、平年が6月5日ごろで、昨年は6月11日ごろでした。右の表は過去5年間の四国地方の梅雨入り・梅雨明けの記録です。

過去5年間の四国地方の梅雨入り・梅雨明け

	梅雨入り	梅雨明け
2022年	6月11日ごろ	7月22日ごろ
2021年	5月12日ごろ	7月19日ごろ
2020年	6月10日ごろ	7月29日ごろ
2019年	6月26日ごろ	7月25日ごろ
2018年	6月5日ごろ	7月9日ごろ
平年	6月5日ごろ	7月17日ごろ
最早	5月12日ごろ（2021年）	7月1日ごろ（1964年）
最遅	6月26日ごろ（2019年）	8月2日ごろ（1954年）

【気象用語】「線状降水帯」とは

毎年のように全国のどこかで記録的な大雨により甚大な被害が発生しています。その際に報道等から線状降水帯という言葉が聞かれるようになりました。

線状降水帯とは次々と発生する発達した雨雲（積乱雲）が列をなし数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される長さ50～300km程度、幅20～50km程度の線状に伸びる強い降水域を言います（図1）。ただし、気象の世界では線状降水帯は数十年前から研究の対象となっており、線状降水帯の定義は研究者により様々です。

線状降水帯の発生は未解明な部分もありますが、概ね次のように考えられています（図2）。

- 1 大気低層を中心に大量の暖かく湿った空気が入り続ける
- 2 その空気が局地的な前線や地形などの影響により持ち上げられて雨雲が発生する
- 3 大気の状態が不安定な状態の中で雨雲が積乱雲にまで発達する
- 4 上空の風の影響で積乱雲や積乱雲群が線状に並び

線状降水帯が発生すると記録的な降水となり被害を発生させることがあります。気象台から大雨について警戒を呼び掛けている時は、気象庁HPの「雨の動き」等に注意していただき、皆様のお住いの場所で雨雲が線状に並ぶようなら安全な場所への避難について考えてください。

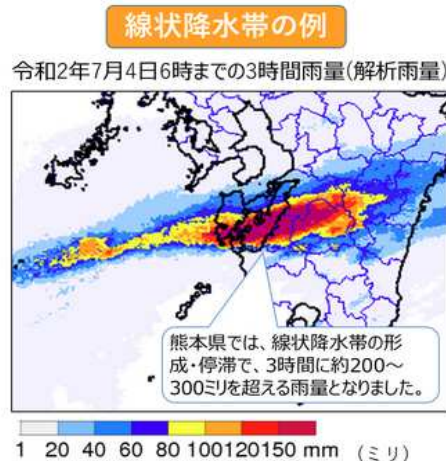


図1 線状降水帯の発生例

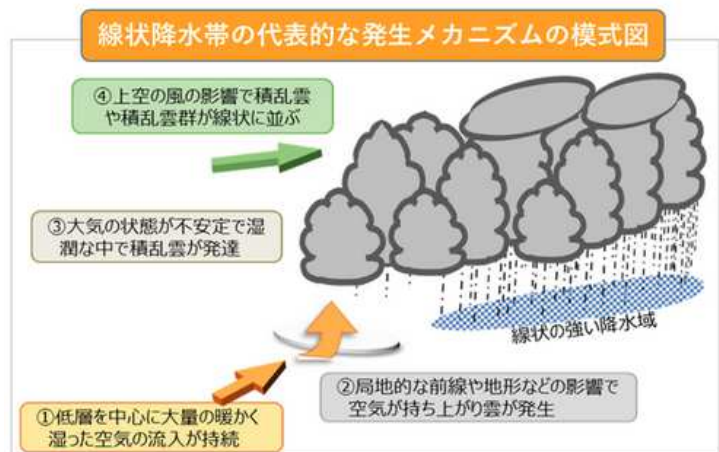


図2 線状降水帯の発生メカニズム